

# 近世の回国塔と回国納経

田 代 孝

- |           |          |
|-----------|----------|
| 1 はじめに    | 4 近世の回国塔 |
| 2 中世の回国納経 | 5 おわりに   |
| 3 近世の回国納経 |          |

## 1 はじめに

六十六部聖は、中世に出現し、法華経を六十六部書写し、これを国ごとに一部ずつ納経して回る者であった。全国を巡って法華経信仰を勧める聖であることから、回国聖と呼ばれている。十六世紀に入ると六十六部聖による納経は、書写した経典を規格化された銅板製鍍金の小型経筒に納めて、各地の社寺に奉納したり、塚を築いて埋納することが盛行する。

この時代の六十六部聖は、地域において寺院を持たない職業的な民間宗教者であったとされる。法華経信仰を各地で広めつつ、時には依頼を受けて回国納経の旅に出ている。施主の願意は、追善供養、逆修供養、息災延命などきわめて身近なものであった。

六十六部聖が主体となって行なった回国納経は、17世紀初頭に転換期を迎えたようである。16世紀末頃になると諸宗寺院の開創が顕著になると、民間宗教者もそれらの寺院に吸収される傾向が現れる。幕藩制の成立期にあって宗教統制が進むと、宗派ごとの系列化が行なわれていく。とりわけ遊行宗教者にとっては大きな影響を受け、その漂泊的な性格は薄れ村落や都市への定着化が加速する。

この動きに対して、一般民衆の経済的自立に伴う宗教行為への傾斜も深まり、やがて集落内における造寺、造仏、造塔、さまざまな講の結成、社寺参詣などが盛んとなる。法華経信仰にもとづく回国納経も、一般民衆が自ら発心して実行する形態が多くなる。各地に見られる六十六部回国成就の記念碑が、そのことを語っている。

これらの記念碑は、最近の市町村における石造物調査で「回国塔」、「巡拝塔」、「供養塔」などとして取り上げられている。本稿ではそれらの調査成果を参考に近世の回国納経の様相の一端を探ろうとするものである。

## 2 中世の回国納経

### (1) 甲斐国と六十六部聖

甲斐国の六十六部聖については、小型経筒の銘文から知ることができる<sup>1)</sup>。

大六塚（韮崎市大草町上条東割）出土の永正18年（1521）銘の経筒には、「甲叚甘梨庄聖願興」とあり、地元の六十六部聖の名が見える。また塔の越経塚（北巨摩郡双葉町下今井）出土の二点の経筒のうち、永禄4年（1561）銘の経筒には「摂津国之住清覚」、年号不詳の経筒には「肥前国住照白」とあり、さらに円楽寺（東八代郡中道町右左口）伝世の元亀2年（1571）

銘の経筒にも「下総住人圓金坊」とある<sup>2)</sup>。遠く摂津国、肥前国、下総国から甲斐国へと巡ってきた他国出身の六十六部聖たちである。

甲斐国出身の六十六部聖も諸国を巡っている。下上野塚経塚（福島県大沼郡新鶴村）の当年今月吉日銘経筒には「甲叕之住長雲坊」、成瀬経塚（東京都町田市）の当年今月銘経筒には「甲州祐順」、嘉良寿里経塚（茨城県新治郡八郷町）の大永3年（1523）銘経筒には「甲叕高家住道喜」、大田南八幡宮（島根県大田市）鉄塔内の永正18年（1521）銘経筒には「甲叕巨麻郡甘梨庄住侶沙門」、大永5年（1525）銘経筒には「甲叕巨摩郡加賀美住侶道華」、大永7年（1527）銘経筒には「甲叕府中於真」、天文5年（1536）銘経筒には「甲叕住道折」、天文12年（1543）銘経筒には「甲叕之住侶来順」、年号不詳の経筒には「甲叕黒駒住侶□真」などがある。

なお小型経筒による納経の全国例で最も早いものは、大阪府和泉市の施福寺境内の横尾明神付近から出土した永正11年（1514）銘の経筒であり、山梨では大六塚の永正18年（1521）である。遅い例としては、東京都西多摩郡五日市町の大悲願寺に伝世されている天正13年（1585）銘の経筒であり、山梨では円楽寺の元亀2年（1571）である。

報告されている小型経筒の銘文から、回国納経に甲斐国出身や他国出身の職業的な遊行宗教者としての六十六部聖の姿がうかがえる。

## （2）六十六部聖の居住地

小型経筒の銘文は短く、情報は少ないのであるが、それらのいくつかに国・郡名以外に、村名段階まで認められるものがある。大六塚出土経筒に「甲叕甘梨庄」、大田南八幡宮鉄塔内経筒に「甲叕巨麻郡甘梨庄」、「甲叕巨麻郡加賀美」、「甲叕府中」、「甲叕黒駒」、加良寿里経塚出土経筒に「甲叕高家」、那智山経塚出土経筒に「甲叕甘梨庄」などとある。

「巨麻郡甘梨庄」は、平安時代末期に成立した荘園名であるが、戦国期には広域名称化して甘利と呼ばれ、甘利氏の拠点となっている。大六塚や大田南八幡宮の永正18年（1521）銘の経筒が納められた頃は、甘利虎泰（?～1548）が武田信虎・信玄に仕え活躍した時期である。那智山経筒も大永2年（1522）である。この時期の甘利には六十六部聖の指導的な人物が存在したのであろうか。

大田南八幡宮の大永7年（1527）経筒に「甲叕府中」とあるが、武田信虎は永正16年（1519）に躑躅ヶ崎館を構え、城下町を建設する。甲府の始まりである。ここに国内の将士を集住させ、社寺を配置し、商工業者を集め、領国経営の中心とした。発展する城下町は、六十六部聖にとって格好の活動の場であったであろう。

大永5年（1525）経筒に「甲叕巨麻郡加賀美」と見えるが、この地には真言宗の名刹法善寺がある。戦国期には武田氏の帰依を受け寺運は興隆するが、信玄は越後侵攻にあたって、永禄11年（1568）戦勝祈願を依頼し、翌年子院福寿院の法華経読誦の功を賞し、棟別銭を免除している。子院が多数ある大寺院が存在する地域での六十六部聖の活動はいかなるものであったろうか。

年不詳の経筒に「甲叕黒駒」とある。鎌倉街道の要衝黒駒には、時宗寺院では甲斐国で最も

古い開創とされる称願寺がある。嘉良寿里経塚の大永3年（1523）経筒に「甲又高家」とあるが、『武田氏過去帳』の永禄7年（1564）に甲州八代高家土屋善衛門と見える。戦国期に土屋氏の居住地であったことが知られる。

六十六部聖の「住」の状況は、城下町であり、大寺院の所在地であり、有力土豪層の勢力地域であることがうかがえた。六十六部聖は俗世を避けて静かに住むという立場ではなく、法華経信仰を布教し易い、人々のくらしのある地域に居住したことが推測されるのである。

『小庵の役割』<sup>3)</sup>の中で宮本常一氏は、仏教者と民衆の接点について述べている。中世における聖は、寺院に属することが少なく、たえず放浪をこととする生活であったことから、人々から食事が与えられたり、宿が与えられたり、時には村でささやかな住居（小庵）をつくって提供されたという。庵を与えられた聖は、村の死者の世話をしたり、信仰を勧めたりしたという。さらに田畑を持たないので、村人の布施で生活していたとされる。六十六部聖もこれに近い生活があったことを考えておきたい。

### （3） 回国納経の依頼者

戦国期に回国納経を六十六部聖に依頼することができたのは、一般的には社会の中間層であったといえよう。甲斐国にあっては、武田氏の家臣団を構成する武士層などが相当する。具体例としては、上蔵原経塚（北巨摩郡高根町上蔵原）の天文21年（1552）銘の経筒がある<sup>4)</sup>。

十羅刹女 甲男住侶中村

（梵字バク）奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神 天文二十一年今月

この経塚は中世の在地土豪に関係するとされる土塁に囲まれていた。また近接して石造物群が見られる。その中の永禄12年（1569）銘の宝篋印塔は、「授林道傳」とあり、逆修供養として造立されている。授林道傳は、高野山成慶院の『武田家過去帳』の弘治2年（1556）に、「逸見蔵原中村右近丞授林道伝禅門逆修」と見える。このことから経塚が中村右近丞が施主となって営んだことが考えられるのである。中村氏は武田家臣団の一つ、津金衆との関連がうかがえる在地土豪である。

また先にあげた大永二年銘の那智山経筒の依頼者は、「大旦那駿府府中鳥坂又四郎定重」であり、大田南八幡宮の永正18年銘経筒では「旦那甲男松宮内殿逆修」とある。中村氏と同じく在地土豪層を形成していた人々であろう。

### （4） 六十六部聖の回国巡拝

六十六部聖の回国納経の旅は、諸国を対象としており、その成就の道程は苦行そのものであった。『甲陽軍艦』の「信玄公御時代諸大将之事」に「其一年中、六十六部の聖とつれて、奥州、出羽、関東、其外所々を修行し給ふ」と見える。軍学書ではあるが、専門の六十六部聖の姿があり、長期間をかけて諸国の霊場を巡拝していた様子を伝えている。六十六部聖の存在が、中世社会の事象として一般的であったことが知られる。

甲州出身の聖が諸国を巡っていることを証する経筒については、先にふれたところである。「甲叕之長雲坊」とある経筒の出土した福島県大沼郡新鶴村の下上野塚経塚は、甲州の六十六部聖が関係したものとしては最北の事例となっている。福島県では他に四例の経塚が知られている。新鶴村の奥之院経塚・享禄5年(1532)、喜多方市の湯殿山神社経塚・永禄6年(1563)、耶麻郡西会津町の五職神経塚・永正15年(1518)と永正16年(1519)、伊達郡霊山町の行人田一号経塚・天文4年(1535)であり、経塚は会津盆地周辺地域に多いようである。島根県の大田南八幡宮の経筒の中にも「奥叕会津黒河住本願常君」(永正18年)、「奥叕会津野河住本願聖高巖」(大永4年)とあり、会津地方が六十六部聖の活動の一拠点になっていた可能性がある。

西会津町の真福寺には、貞和2年(1346)から正平8年(1353)にかけて、15通の納経請取状があり、14世紀中頃には六十六部聖の回国巡拝がすでに行なわれていたことが知られる。早くから六十六部聖の活躍できた環境が推測される。

西会津町から県境を越えると新潟県東蒲原郡となる。鹿瀬町日出谷の三間四面の護徳寺観音堂には、堂内の柱・腰板等に墨書があり採録されている<sup>5)</sup>。その内容からは戦国期の旅人のいきいきした姿が浮んでくる。この時代に「よそ者」を泊める村はなく、旅人の夜の宿とといえれば村はずれの村堂や神社である。堂内の南側第二柱墨書として、「□□国陸拾□部□元亀三年八月十六日」が紹介されている。

この元亀3年(1572)頃の阿賀野川沿いは、会津と越後を結ぶ重要な交通路となっていたことから、旅人の往来も盛んであった。旅人の中には回国納経に必要な諸用具を納めた箆を背にし、先を急ぐ六十六部聖の姿もあった。観音堂は旅人にとって格好の一夜の宿であったにちがいない。

中世の六十六部聖の回国巡拝路については、六十六部聖によって若干の異なる巡拝地もあるが、およそ一定の巡拝路が確立していたことが指摘されている。甲斐国では元亀2年銘の経筒が奉納されていた円楽寺が、中世から近世へ引き続いて巡拝地となっている。

近世に入っても六十六部聖が回国納経を行なっている事例がある。奈良市中之庄町で出土した承応4年(1655)銘の経筒と、その中に納められていた1通の願文と36通の納経請取状がある<sup>6)</sup>。それによると大和国中之庄の妙香尼が六十六部の納経を発願し、一門眷族210人がこれに結縁し、下野国半田村の元秀坊が願主に代り、西国36か国を巡拝奉納し、社寺から納経請取状を持ち帰ったことが知られる。承応2年(1653)10月から始めて、1年4か月後の承応4年2月に終って、明暦元年(4月改元)8月6日大願成就の供養を行い、これらの請取状や願文などを一括埋納している。このことから、近世初期においても中世的な六十六部聖が活動していることも事実である。

### 3 近世の回国納経

#### (1) 近世寺院の成立と六十六部聖

近世においても六十六部聖として活動している下野国の元秀坊の事例を紹介した。16世紀後半に盛行した小型経筒を用いた納経の最後は、東京都西多摩郡五日市町の大悲願寺にある天正

13年（1585）銘の経筒である。これ以後の経筒を用いた納経の衰退は、六十六部聖の活動様式の転換を意味するものであろう。

その背景には中世から近世の人々の宗教的要求の変化が考えられよう。一般の人々の死は無惨であった。それゆえに野ざらしになるのではなく、菩提寺によって葬儀が行なわれ、墓に納められることを強く望むようになった。この時期に多くの寺院が開創されたことが、そのことを示しているといえよう。

諸宗寺院開創年代について圭室文雄氏は、水戸藩における事例をあげている<sup>7)</sup>。宝徳3年（1451）以降寛文3年（1663）までの約200年間に、1735寺院の約85パーセントにあたる1473寺院が建立されたとする。また竹田聴洲氏は、諸国（72国）の浄土宗寺院6008寺が元禄9年（1696）に提出した由緒書では、その90パーセント強が文亀元年（1501）以降開創もしくは再興を伝えているとし、さらに天正元年から寛永20年（1573～1642）のわずか70年間に全体の62パーセント弱が集中するという<sup>8)</sup>。

『昭和町誌<sup>9)</sup>』では、日蓮宗12寺、曹洞宗6寺、臨済宗1寺、浄土宗3寺、浄土真宗1寺の計23寺がある。19寺で約83パーセントが弘治元年（1555）から寛文9年（1669）の114年間に開創されている。昭和町の例も同様の傾向にあることが知られてる。このことから戦国時代後半から織豊期、さらに幕藩制成立期にかけての約1世紀半、とりわけその後半期に寺院開創が多くなっている。

開創にあたって、現存、廃絶寺院の再興、改創があるが、形態として武士階層による持庵（持仏堂・氏寺）的形態と、惣村ないし民衆共有の惣堂的形態に別けられるとされる<sup>10)</sup>。

昭和町の本妙寺の由緒によれば、「曲淵庄左衛門吉景は、武田信玄、勝頼二代に仕えたが、天正10年（1582）3月武田氏が滅亡して、故郷に隠遁した。その後徳川家に仕え江戸に赴いた。屋敷地を妙徳庵と称し、尼になった老母に譲り、寛永2年（1625）草庵を再建して寺院とした」とある。また浄慶寺の由緒では、「天正14年（1586）、武田信玄の重臣であった鷹野淡路守の子息三四郎が三河国岡崎で病死したので、その供養のために寺を建立した」とある。いずれも武士の持庵的形態であり、一族、先祖、主君などのための菩提所・牌所・墓所・葬所などである。

同じく長泉寺の由緒では、「原野であった清水新居は、移住した人々によって開拓が進められた。ある日、原野から光明を放つ一体の銅仏を掘りおこし、これを守り本尊として小堂を建て安置した。その後青松院の弟子僧が天正2年（1574）に堂宇建立を発願し、人々の喜捨を仰いで寺を建立した」とある。これは惣堂的形態といえるであろう。

両者の形態とも開創にあたっての開山僧には、その地に巡ってきた遊行宗教者や、既存寺院の余剰僧侶などであった。特に遊行宗教者は、その遊行的性格を廃して、定住僧としての生活形態をとるようになる。ここに中世的な六十六部聖の活動の後退が見られる。

諸宗寺院が、寺院本末制と寺請檀家制とによつて、幕藩権力の完全な統制のもとにおかれるようになると、修験者、陰陽師、盲僧、あるき巫女などの祈祷系の宗教家や、勧進聖、三昧聖、茶筌、鉦打ちなどの念仏系の宗教者も、漂泊的な活動形態から定着させられ、あるいは衰退し

ていったのである。なおこれらの宗教者が皆無になったのではなく、本山や本所、本社に組織編成させ、登録させることによって間接的に掌握したのであり、その限りにおいて活動は可能であったといえよう。先に紹介した下野国の元秀坊などがこれに相当するのであろう。

#### 4 近世の回国塔

##### (1) 回国塔の分布

石造物の調査報告の中から七市町村<sup>11)</sup>を選び、回国塔を抽出して年代順に整理し、検討を行ないたい。

調査報告書で回国塔として扱っているのは、「日本廻国供養塔」「大乘妙典日本回国」「奉納大乘妙典六十六部日本回国」「六十六部供養塔」などである。回国塔で最も古いものは甲府市山宮町の寛永6年(1629)であり、新しいものは塩山市上萩原の文久3年(1863)である。宝永期(1704—1711)から回国塔の造立が増加していることがうかがわれる。

回国塔の形状は、自然石を用いた基台に板状や丸柱状の自然石の碑身を据えたものと、角柱状に加工されたものがある。加工されたものには、碑身に笠を持つものもあり、また、基台に蓮弁を施したものも見られる。塔の高さは5尺(約152センチ)を越えるものは少なく、3尺6寸(約110センチ)前後のものが多いようである。

回国塔が造立される原因は、碑文などからいくつかあげることができる。双葉町駒沢の享保9年(1724)の回国塔碑文には、

當國巨摩郡北山筋当村之住  
奉納大乘妙典六十六部成就  
峯享保九甲辰天霜月吉萱  
行者性順坊

とあり、さらに、高根町村山北割の享保15年(1734)の回国塔碑文には、

享保十五歲十月日  
日本廻国成就所  
願主元明

とある。各地の社寺に大乘妙典(法華經)を納めるために諸国をまわった行者が、回国納經を成しとげたことを記念して造立している。

また造塔することによって功德が得られるとし、回国行者が勧進して造立したものも見られる。明野村正樂寺の享和元年(1801)の回国塔碑文には、

天下和順 信州諏訪郡知野村  
奉納大乘妙典供養塔  
日月清明 六十六部行者空明  
維時享和元辛酉四月吉日

とある。

回国納經にはさまざまな困難もあり、不幸にも旅の途中で倒れた者もあった。高根町村山東

割の回国行者の墓とされる塔の碑文には、

帰元□山日道者霊位  
丹波国笹山□谷村  
俗名想左衛門  
行年六十六

とあり、丹波国から甲斐国まで回国してきたが、病を得たのであろうか。このように諸国を巡っているときに倒れた行者を弔って造立している。

さらに大月市初狩町下初狩の宝永 8 年（1711）の回国塔碑文には、

于時宝永八歳辛卯星  
日本回国六十六部宿供養法界平等利益  
卯月二十四日 施主 当村 奥脇勘左衛門

とあり、また、明野村藤内の天保 2 年（1831）の回国塔碑文には、

全文六十六部塔  
天保二辛卯稔八月穀旦  
廻国一千余人宿供養  
願主 藤内伝左衛門 建焉

とある。回国行者の寺社や辻堂などに雨露をしのぐことも多かったと思われるが、このような行者を世話することも功德であったので、その世話した人数が一定数になった時に世話人が造塔している。

## （2）回国塔に見える行者

行者は回国納経を实践した者であり、回国成就を記念して造塔を行なっているが、銘文中にその名を記している例が多く見られる。

高根町下黒沢の慶安 3 年（1650）の回国塔の銘文は次のとおりである。

但羽之住宥□上人  
十方旦那  
奉納大乘經一国六十六部供養所  
為二世  
慶安三庚寅年二月日

本稿で取り上げた回国塔としては二番目に古いものであり、銘文の構成は中世の小型経筒の銘文に通ずものがある。小型経筒の終りは天正13年（1585）であるが、それから65年後に造立されている。但州出身の「宥□上人」は、回国聖の活動を続けてきた人物であろうか。奈良市中之庄町の承応 4 年（1655）の経筒で紹介した下野国の「元秀坊」と同時代の人物である。

双葉町の享保 9 年（1724）の回国塔に見える「行者性順坊」や、明野村の享保元年（1801）の回国塔に見える「六十六部行者空明」も、回国聖の系譜を継いできた者であろう。

同じく明野村三之蔵の安永 7 年（1778）の回国塔には、次のような銘文が見られる。

# 回国塔の造立年代

年代	市町村 西暦	甲府市	塩山市	大月市	都留市	双葉町	高根町	明野村
慶長	1596—1615							
元和	1615—1624							
寛永	1624—1644	6(1629)						
正保	1644—1648							
慶安	1648—1652						3(1650)	
承応	1652—1655							
明暦	1655—1658							
万治	1658—1661							
寛文	1661—1673							
延宝	1673—1681							5(1677)
天和	1681—1684							
貞享	1684—1688							
元禄	1688—1704							
宝永	1704—1711			7(1710) 8(1711)				7(1710)
正徳	1711—1716		1(1711)		4(1714)		2(1712)	
享保	1716—1736		14(1729)	3(1718)		9(1724)	3(1724) 8(1724) 9(1724) 10(1724) 11(1724) 12(1724) 13(1724) 14(1724)	
元文	1736—1741						5(1740)	
寛保	1741—1744							2(1742)
延享	1744—1748							
寛延	1748—1751		3(1750)				1(1748)	
宝暦	1751—1764	7(1757)		6(1756) 11(1761)	6(1756) 10(1760)		3(1753)	5(1755)
明和	1764—1772		2(1765)	6(1769)	5(1768) 7(1770)	5(1768)	3(1766) 5(1768)	
安永	1772—1781	8(1779)			6(1777)		2(1773) 4(1775)	
天明	1781—1789						1(1781) 2(1782) 6(1786)	
寛政	1789—1801	7(1795) 7(1796) 9(1797)		2(1790) 8(1796)			5(1793)	
享和	1801—1804				3(1803)			1(1801)
文化	1804—1818	9(1812)		13(1816) 13(1817) 14(1817)	6(1809)		2(1805) 4(1807)	2(1805) 7(1810)
文政	1818—1830	7(1824) 10(1827) 11(1828)					1(1818) 8(1825)	
天保	1830—1844			12(1841)			4(1833) 12(1841)	1(1831)
弘化	1844—1848							
嘉永	1848—1854						7(1853)	
安政	1854—1860		4(1857)				3(1856) 6(1859)	
万延	1860—1861						1(1860)	
文久	1861—1864		3(1863)					
元治	1864—1865							
慶応	1865—1868							
	小 計	10	6	12	8	2	28	8

天下泰平

奉納日本廻回

国土安全

安永七戌戌年二月十

四日

清山祥心信士

江戸豊島町俗名行者

東五郎

江戸の町人層であった行者東五郎は、信仰心の厚い人物であった。また文化7年(1810)の道標を兼ねた回国塔には、「九州肥後国熊本城下行者傳十良」とある。

大月市賑岡町の文化13年(1816)の回国塔には、「当村行者利兵衛」とあり、天保12年(1841)の回国塔には、「行者角右衛門九右衛門」とある。なお「願主」、「施主」などもある。都市や村落の町人層や本百姓層が回国行者として、回国塔の造立に主体的に関与していることが知られる。

高根町のみでかれらの出身地を見ると、常陸、信濃、尾張、丹波、但馬など全国的である。各国から巡ってきて、そして次の地へ向っていったのである。回国塔は回国行者の信仰心の現われであり、回国巡拝という旅の



形見である。

### (3) 近世の回国巡拝

18世紀初頭の宝永・正徳・享保期にかけて、回国塔の造立が増えていることは先に見た。このことは回国納経の盛行を示すものであるが、そのことを促したと思われる出版事業がある。天野信景著の『塩尻』の中に、東武の旭誓が木版掘りで刊行した『六十六部聖順拝路』を載せている。また下野国河内郡新里村の念西の著した『廻国六十六部縁起』も、18世紀前半頃の刊行である。これら刊行物は「六十六ヵ国及二嶋此度廻国人之ために板行いたす者也」とある。このような案内書を購入して回国の旅を行なう人々が多数存在したことが知られる。

18世紀初頭の正徳3年(1713)から享保3年(1718)の5年間に、全国163か所の社寺に納経を行なった甲斐国八代郡右左口村の千野忠右衛門について、別稿で報告したところである<sup>12)</sup>。回国行者の忠右衛門の納経は、1か国で数か所を巡拝していることが多い。『塩尻』が秩父、坂東、西国、四国、六十六部の霊場を一緒にして回国巡拝する流行現象を指摘しているが、163か所を5年かけた忠右衛門の歩みに、回国行者としての真摯な信仰心を見ることができる。

回国巡拝者の中には信仰に基づくのではない者も少なからずいることが指摘されている。『塩尻』には「六十六部の回国三十三所の順禮世に多く、夫ならぬものもめぐりありきて活命し侍る。甚敷は盜賊の類、間々侍るとなん、此故に其止宿を禁ぜらるゝ所など聞ゆ、和州高取等のごとし」とあり、いかがわしい者も入りこんでいたのである。

また『寺社法則』の文化11年(1814)に「六十六部興唱候名目、奉行所ニハ無之候(中略)施物貰請候處、物貰とも村方ニ而ハ可申哉二候(中略)違変等出来之節ハ、其身分等、得興糺之上、御問合可有之筋と存候」と見えるが、近世末期の六十六部ないし六部と呼ばれていた者の中には、施しを受けることを目的とした者や無法者などが含まれていたことがうかがわれる。

山梨県韮崎市に「まりつき唄」がある<sup>14)</sup>。

本町二丁目の 宿屋の娘

年は十六 今咲く花よ

嫁に行こうか 婿とりましょか

ゆうていとけ 六部が泊まり

あのや六部は 金持ち六部

六部殺して 金とりゃしゃんせ

人を殺すと 我が身がこわい

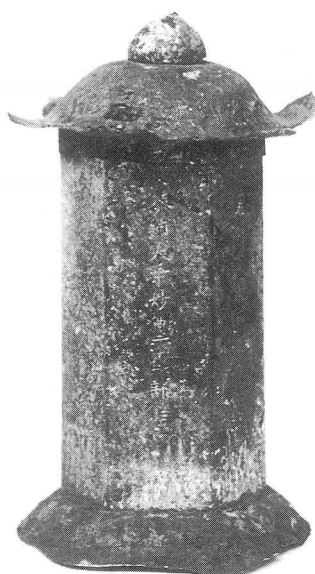
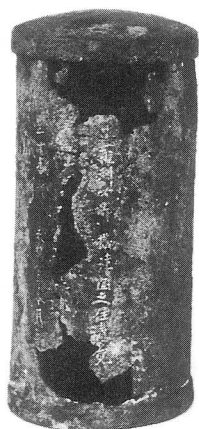
親のいうこと 聞かないものは

うちじゃいらない 出て行きゃしゃんせ

娘こわごわ 六部を殺し

親子三人 鋸びきよ

文政年間(1818~30)に起きた韮崎上宿の旅籠屋親娘三人による六部殺し事件をうたったものである。街道の整備や宿泊所の充実は、近世の社寺参詣を発展させた要因の一つとなって



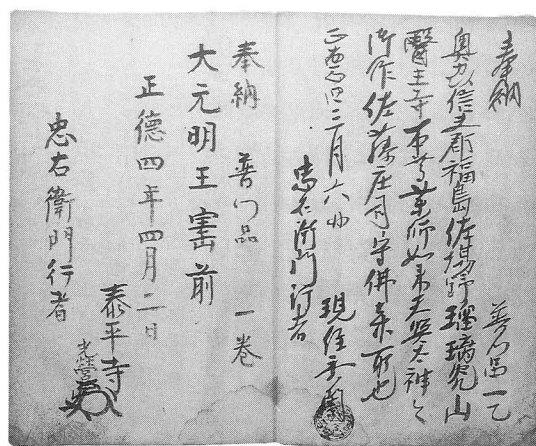
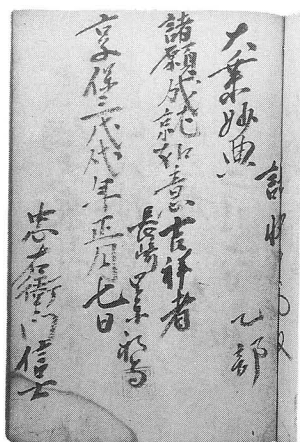
塔の越経塚出土経筒（双葉町下今井）

十羅刹女 撰津国之住清覚  
奉納大□□□六六六部□  
三十番神 永禄×年今月吉□

十羅刹女 肥前国住照白  
奉納大乘妙典六十六部聖  
三十番神 当年今月末日

円楽寺経筒（中道町右左口）

十羅刹女 下総住人圓金坊  
（釈迦座像）奉納經王六十六部  
三十番神 元亀二年今月日



納経請取状（中道町・千野家蔵）

享保3年・忠右衛門信士

正徳4年・忠右衛門行者

正徳4年・忠右衛門行者



大乗妙典六十六部供養塔（享保10年）  
高根町下蔵原鑑堂



大乗妙典塔（嘉永 7 年）  
高根町下蔵原鑑堂



日本回國塔（安永 7 年）  
明野村三之蔵



回國千人供養塔（明和 7 年）  
都留市田野倉三島神社

いる。うたわれている六部は、富裕な階層であり、整備された甲州道中を気軽に物見遊山の気分であどっていたのであろうか。六十六部の回国納経にもしばしば危険が伴ったことが知られる。

## 5 おわりに

近世の六十六部の回国納経を検討するには、中世末期の六十六部聖を見ておくことが必要である。その遊行性の強い民間宗教者としての実態は、若干の記録類や納経に際して用いた小型経筒などの考古資料から、その解明が試みられている。本稿もそれらの資料を基に検討を行ってきたところである。

16世紀末から17世紀初頭にかけては、諸宗寺院の開創が増大することにより、六十六部聖の漂泊的な性格は薄れ、定着化が進み、さらに幕藩制の統制により六十六部聖の存在そのものが後退を余儀なくされたことが知られた。

しかし法華経信仰は途絶えることなく、近世社会の中で経済的自立を図ってきた一般民衆によって、引き継がれてきたことを納経帳や回国塔の存在によって知ることができた。

回国納経という信仰形態が、都市や村落の構成員である一般民衆に支持されてきた背景などについて検討するにいたらなかった。今後の課題としたい。

明治元年（1868）神仏分離令が布告され、明治4年には陰陽道廃止、六十六部の禁止、普化宗（虚無僧）の廃止、翌年には修験道（山伏）の廃止などが新政府によって命じられた。六十六部の禁止から126年、すでにその実態について不明なことが多い。まして中世までとなるといっそう厳しい状況である。

六十六部に関する文書や記録類の調査、回国塔の分布調査などを継続し、近世社会における民間信仰の一形態としての回国納経について、これからも検討を深めたい。

## 註

- 1) 関 秀夫「経塚遺物の紀年銘文集成」『東京国立博物館紀要15』1980年
- 2) 田代 孝「七覚山円楽寺の経筒と泥塔について」『考古学ジャーナル258』1986年
- 3) 宮本常一「村のなりたち」『宮本常一集41』1987年
- 4) 田代 孝「七覚山円楽寺の経筒と廻国納経」『山梨考古学論集1』1986年
- 5) 『新潟県史資料編5 中世3』1984年
- 6) 『経塚—関東とその周辺』東京国立博物館 1988年
- 7) 圭室文雄「幕藩体制における保護と統制」『日本歴史Ⅱ』山川出版社 1977年
- 8) 竹田聰洲「近世社会と仏教」『岩波講座日本歴史の近世1』岩波書店 1975年
- 9) 『昭和町誌』1990年
- 10) 8) に同じ。
- 11) 『塩山市の石造美術』1983年、『都留市の石造物』1983年、『高根町誌—民間信仰と石造物—』1984年、『双葉町の石造物』1993年、『大月市の石造物』1994年、『甲府の石造物』1994

年、『新装明野村誌—石造物編』1996年

12) 4) に同じ。

13) 「佛教四十一参詣、六十六部納経」『古事類苑』

14) 手塚洋一『山梨の民謡』山梨ふるさと文庫 1987年

#### 参考文献

1) 畑 大介「山梨県における石和の様相—石造物調査報告書の資料化をめぐる一」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会 1994年

2) 関 秀夫『経塚の諸相とその展開』雄山閣 1990年

3) 高埜利彦「江戸幕府と寺社」『講座日本歴史近世1』東京大学出版会 1985年